The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生との英語学習プログラム “Project HELP!” の実践報告 : アンケート結果の分析を中心に
Author(s)	中野, 遼子; 近藤, 佐知彦
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2019, 23, p. 35-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71585
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

留学生との英語学習プログラム “Project HELP!” の実践報告

── アンケート結果の分析を中心に ──

中野　遼子*・近藤佐知彦†

要　旨

本稿では、大阪大学国際教育交流センター主催の留学生との英語メンタリング学習プログラムであるProject HELP! について概観し、これまでに筆者らが行ったアンケート調査結果について記述し、本プログラムの今後の課題について述べる。

【キーワード】英語学習、留学生、メンタリング、タンデム

1　はじめに

現在、日本では受け入れ留学生数が増加しているが、留学中に日本人学生との友人関係を構築できない例が数多く報告されている（中山 2001；小松 2013）。そこで、大阪大学では、2015年度から本学の英語学習者（メンティー）と英語が堪能な留学生（メンター）をマッチングし、メンティーのInternational English Language Testing System（英語力証明試験。以下、IELTS）のスコア向上を目指す3ヶ月間の英語メンタリング学習プログラムであるProject HELP!（Harmonized English Language Program, 以下、HELP!）を実施している。2018年12月現在、第8期目のプログラムが進行中である。さらに、2018年度は外部機関と連携し、2020年の大学入試改革を見据えて、7人のA高校生徒を対象に本学メンターによる3日間の英語メンタリング学習プログラム（以下、HELP!+）を試行した。そこで、本稿では、これまでのHELP! 参加者に実施したアンケート結果をまとめ、今後のHELP! およびHELP!+ の展望について述べる。

2　Project HELP! とは

2-1　HELP! の概要

HELP! は、筆者らが所属する大阪大学国際教育交流センター（以下、CIEE）が主催し、2015年度より年2回実施されている。具体的には、マッチングされたメンティーとメンターが、特にスピーキングとライティングに焦点を当てて、メンティーのスコア向上（本学の交換留学派遣に必要なIELTS 6.0以上）を目指して行う、3ヶ月間で90分×8回、計12時間の英語メンタリング学習である。本稿におけるメンタリングとは、メンターがメンティーに「英語を教える」のではなく、「目標とするIELTSスコアが獲得できるよう支援し、英語力向上につながる行為・行動を導くこと」である。さらに、HELP! は、ブリティッシュ・カウンシル（以下、BC）および日本英語検定協会（以下、英検協会）の協力のもと、オリエンテーション時にメンターへのIELTS指導研修やメンティーへのIELTS試験（スピーキングを除く）も実施している。8回のメンタリング終了後、メンティーにはIELTS受験およびスコア報告を義務付けており、メンターには修了証が授与される。このように、外部機関の協力により制度化された本プログラムは、メンター・メンティーともに参加者満足度が

* 大阪大学国際教育交流センター特任助教
† 大阪大学国際教育交流センター教授

高く、毎期平均95％以上である。

ここで、HELP!の実施担当者は、CIEEの短期プログラム開発研究チームの近藤佐知彦教授、および宮原啓造准教授（2017年度まで）、北山夕華准教授（2018年度から）、歳岡冴香特任助教（2016年度まで）、中野遼子特任助教（2017年度から）、そして遠藤美紀特任事務職員（2017年度まで）、垣塚保子事務補佐員（2018年度から）である（肩書きはいずれも当時のもの）。

2-2　HELP!の応募者・参加者について

本項では、これまでの応募者・参加者の傾向について述べる。まず、第１期から第８期までの応募総数は274名である。学部から応募した学生の所属部局は、文学部13名、人間科学部14名、外国語学部67名、法学部37名、経済学部31名、理学部10名、医学部９名、歯学部２名、工学部19名、基礎工学部13名である。そして、大学院生の場合の所属研究科の内訳は、文学研究科５名、人間科学研究科８名、法学研究科２名、経済学研究科８名、理学研究科３名、医学系研究科13名、薬学１名、工学研究科５名、基礎工学研究科４名、言語文化研究科２名、国際公共政策研究科８名となっている。外国語学部所属学生の応募者が最も多く、次いで法学部、経済学部と続いており、全体的には文系学生の応募が多いことが分かる。ただし、工学部、基礎工学部、医学研究科といった理系学生による応募も比較的多く、HELP!は全学的に需要のあるプログラムであるといえる。

次に、HELP!の参加者数推移について記述する。まず、第８期までの参加者を表１にまとめた。

表１　HELP!の参加者数（カッコ内は応募者数）

時期	メンター	メンティー	ペア数
第１期（2015後）	11（14）	11（32）	11
第２期（追加募集）	7（８）	7（22）	7
第３期（2016前）	22（24）	22（41）	22
第４期（2016後）	29（37）	33（47）	33
第５期（2017春夏）	16（16）	30（45）	30
第６期（2017秋冬）	23（24）	37（42）	37
第７期（2018春夏）	35（36）	35（38）	35
第８期（2018秋冬）	25（26）	31（31）	31

2015年度後期にHELP!第１期が開始したが、メンティー応募者数と比較してメンター参加者数が少なかったため、すぐに第２期としてメンターの追加募集を行い、補欠メンティーおよび新規応募者の計22名から新たに７名を選抜してマッチングを行った。その後も、ほぼ毎回メンティーの応募者が多く、できる限り多くのメンティーが参加できるように、可能なメンターには２人のメンティーを担当してもらうことにした。このようにして、第４期以降は、毎期30組以上のペアをマッチングしている。しかし、メンティーの応募者は毎回多いが、メンターの応募者が平均20数名であり、また運営上あまり手を広げられる状況ではないため、今後も同程度のペア数で続けていくと思われる。

2-3　HELP!の実施スケジュール

本項では、HELP!の実施スケジュールについて概観する。スケジュールをまとめると表２のようになる。

表２　HELP!の実施スケジュール

時期	スケジュール
３月／９月	メンター募集開始
４月／10月初め	メンティー募集開始
４月／10月後半	オリエンテーション • メンター：IELTS指導研修（by BC） • メンティー：IELTSレベルチェックテスト（by 英検協会） • メンタリングの説明 • 顔合わせ（スケジュール提出、教科書貸出等）
５月／11月	メンタリング開始 • 90分×８回、３ヶ月間 • 中間アンケート
７月／１月	メンタリング終了
８月／２月	• メンター審議・認定証発行 • 終了後アンケート • メンティーはProject開始から６ヶ月以内にIELTS受験義務あり

まず、３月および９月にメンターの募集を、４月および10月にメンティーの募集を開始する。メンターの募集開始時期が早い理由は、毎期メンターの応募者が比較的少ないためである。そして、４月および10月の半ばに募集を締め切り、参加者の選抜およびマッチングを行う。そこから、１週間程度で参加者への連絡とオリエンテーションの準備を行う。その後、４月および10月の第４週目の土曜日にオリエンテーションを実施し、その際、メンターはBCによるIELTS指導研修を受講し、メンティーは英検協会によるIELTSレベルチェックテスト（スピーキン

グ以外。第７期以降はリーディングとリスニングのみ）を受験する。そして、メンタリングに関する説明の後、メンター・メンティーの顔合わせが行われる。顔合わせの際は、３ヶ月間のメンタリングのスケジュールをペアで考え提出させ、翌週からメンタリングが開始する。メンタリング期間中は、担当事務職員が参加ペアのメンタリングをモニタリングし、中間アンケートを依頼する。その後、７月および１月にメンタリング期間が終了し、８月および２月にメンターへの認定証発行の審議が行われる。

3　先行研究

現在、英語教育に関する調査は多いが、英語学習者に焦点を当てた研究はまだ多いとはいえない（廣森 2015。また、留学生との外国語学習の分野には、チューターとの日本語学習（岡部 2018；副田 2011）や、タンデム学習（Brammerts 2003；脇坂 2013；青木ら 2017）があるが、きわめて限られた数の先行研究しか見当たらない（小林 2016）。本研究のメンターが、チューターやタンデムパートナーと異なる点は、事前にBCからIELTS指導研修を受講しており、スコア獲得という明確な目標が定められていることである。そして、HELP!の実施背景や実施方法については歳岡（2016a）が詳しい。また、プログラムの英語学習の効果については歳岡（2016b）や中野（2018）がある。

これまでにも、英語教育を実施するにあたり留学生を活用する取り組みは数多く報告されているが、本プログラムのように外部機関と連携し、継続的でシステム化された実践報告は現段階ではほとんど見当たらない。このように、本プログラムは、これまでほとんど行われてこなかった留学生との継続的な英語学習の実施であり、本稿はその効果をアンケート調査の結果を提示しながら述べる。

4　調査方法

HELP!では、第３期から、メンタリング中に中間アンケートおよび終了後アンケートを実施している。ただし、第３期および第４期の終了後アンケートは歳岡特任助教が自身の研究目的で実施したものであるため、筆者らがそのアンケート結果を持ち合わせていない。それゆえ、本稿では、筆者らが実施した第５期から第７期までのアンケート結果について記述する。また、中間アンケートの結果に関しては、紙幅の都合上割愛するが、HELP!の改善点を記述する際に参照する。終了後アンケートについては、第６期まではメンティーのみに実施していたが、メンターへの調査も必要だと考え、第７期からは、双方に実施した。質問項目は、主にHELP!における英語学習とメンター・メンティーとの交流について尋ねた。

アンケート回答者は、メンターは第７期のみの計20名、メンティーは計87名である。アンケート回答者の内訳は表３の通りである。

表３　終了後アンケートの回答者数

単位（名）	メンター	メンティー
第５期（2017春夏）	–	27
第６期（2017秋冬）	–	30
第７期（2018春夏）	20	30
合計	20	87

5　結果

本項では終了後アンケートの結果について述べる。質問項目はメンター用およびメンティー用アンケート共に、全部で15問である。本稿では、紙幅の都合上、特に重要だと思われる質問の結果のみを考察する。

5-1　メンターへの終了後アンケート

まず、メンターへの終了後アンケート結果について述べる。メンターへのアンケートはまだ１回しか実施していないため、特に重要だと考える５問について記述する。

- **質問１　メンタリングを通じて、得たと感じるものは何ですか？**

この質問では、得たと感じる11項目に優先順位をつけてもらい、１番重要なものに３点、２番目に重要なものに２点、３番目以降は１点とした。集計の結果は以下の通りである。

表４　メンタリングで得たこと（メンター）

	回答項目	合計	平均	標準偏差
1	メンティーと交流する機会が持てた	36	1.65	1.04
2	英語を教えることに自信がついた	26	1.2	1.196

3	日本やその他の文化についての理解が深まった	23	1.1	0.912
4	メンタリングによって日本での役割意識を得た	22	0.95	1.234
5	英語を教えることにより興味を持つようになった	13	0.65	0.933
6	IELTS というテストについての知識が深まった	12	0.6	0.598
7	友達ができた	12	0.5	0.946
8	英語力が向上した	6	0.3	0.733
9	日本語力が向上した	2	0.1	0.912
10	出身大学で奨学金をもらうための修了証を得ることができた	1	0.15	0.489
11	特になし	1	0.05	0.224
12	その他	2	0.1	0.447

ここから、メンターは、英語を教える経験以上に、メンティーとの交流がメンタリングにおいて重要だと感じていることがわかる。次いで、日本・その他の文化への理解が深まったこと、そして、日本で役割意識を感じられたことが彼らにとって重要であったことがうかがえる。

- **質問２　メンタリングの時間外にもメンティーと交流する機会がありましたか。**

これは、よくあった（1名）、ときどきあった（7名）、あまりなかった（9名）、全くなかった（3名）となっており、メンタリング外の交流が少ないことがわかる。

- **質問３　質問２で、「あまりなかった」「全くなかった」と答えた方へ：その理由としてあてはまるものに印をつけてください。（複数回答可）**

この回答は、メンティーに時間がなかった（6名）、自分に時間がなかった（5名）、交流したかったが自分に積極性が足りなかった（2名）、趣味や性格が合わなかった（2名）となっており、メンター・メンティー共に多忙であるためメンタリング以外の交流が少ないことがわかる。

- **質問４　メンタリングに満足していますか？**

この質問の回答は、とても満足している（13名）、満足している（7名）、あまり満足していない（0名）、全く満足していない（0名）という結果となり、アンケートを回答したメンター全員がHELP!に満足していたことがわかった。

- **質問５　そのほか、HELP!に関して何かコメントがありましたら、自由に記述してください。**

この質問に対する回答には、「このような経験ができて感謝している」という好意的なコメントもあるが、４名が改善点について回答していた。具体的には、以下の通りである。

- メンティーに対して制裁措置があった方が良い
- メンターは多くの時間を使ってメンタリングの準備をしているので何か報酬がほしい
- 互いの趣味といった情報をメンタリング開始前に知らせてほしい
- キャンパス外でもメンタリングができるようにしてほしい
- メンタリングの時間は、90分×８回より60分×12回の方が良い
- 教材が少ないのでもっと提供してほしい（自分たちで探すのが大変）

HELP!は、８回のメンタリングが完了しない場合、メンターには修了証が授与されないが、メンティーには特別な不利益がない。そのため、メンティーへの制裁処置やメンターへの報酬など不平等の解消を求める意見が多く寄せられた。そのほか、キャンパス内での実施やメンタリング時間といったルールへの改善案も見られた。

5-2　メンティーへの終了後アンケート

本項では、メンティーへの終了後アンケートの結果について述べる。考察する質問は、11問である。

- **質問１　メンターとの英語での会話で、メンターの言葉が聞き取れないことがあった。**

この質問への合計回答は、よくあった（10名）、ときどきあった（42名）、あまりなかった（28名）、全くなかった（7名）となり、よくあった、ときどきあった、の回答が全体の半数以上となっている。

- **質問２　質問１で、「よくあった」「ときどきあった」と答えた方へ：その理由としてあてはまるものに印をつけてください。（複数回答可）**

この質問の回答は、メンターの話すスピードが速かったから（20名）、メンターの発音がなじみのないものだったから（16名）、自分にとって、苦手なもの（例えば数字など）の聞き取りだったから（15名）、自分にとって、馴染みのない話題だったから（11名）、メンターの使う言葉が難しかったから（4名）と続いている。また、その他（9名）の自由回答には、「自分の能力不足」（4名）、「単語自体を知らなかった」（2名）という回答が目立った。ここか

ら、メンティーの多くが実際に英語を話す際のスピードや発音に慣れていないことがうかがえる。

- **質問３　メンターとの英語での会話で、自分の言いたいことが思うように伝えられないことがあった。**

この質問の回答は、よくあった（28名）、ときどきあった（44名）、あまりなかった（15名）、全くなかった（0名）という結果となっており、8割以上のメンティーが自分の言いたいことが思うように伝えられないもどかしさを感じていることがわかった。

- **質問４　質問３で、「よくあった」「ときどきあった」と答えた方へ：その理由としてあてはまるものに印をつけてください。（複数回答可）**

この回答は、英語でなんと言えばいいのか単語がわからなかったから（62名）、必要な英単語は分かっていたが文にすることができなかったから（21名）、英語で話すことに緊張していたから（16名）、自分の発音が適切ではなかったから（11名）となっており、ボキャブラリー不足を自覚させられるメンティーが大多数であることがわかる。

- **質問５　留学生とのメンタリングを通じて、得たと感じるものは何ですか？**

この質問では、得たと感じる16項目に優先順位をつけてもらい、1番重要なものに3点、2番目に重要なものに2点、3番目以降は1点とした。その集計結果は以下の通りである。

表５　メンタリングで得たこと（メンティー）

		合計	平均	標準偏差
1	英語学習への意欲が高まった。	84	0.97	0.958
2	英語を話すことに自信がついた。	81	0.93	1.076
3	英語を使ったコミュニケーションが楽しいと感じるようになった。	76	0.87	0.913
4	英語を話すことが上手になった。	68	0.78	0.982
5	友達ができた。	65	0.75	0.735
6	異文化への興味が高まった。	52	0.6	0.637
7	大阪大学で学ぶ留学生ともっと関わりたいと思うようになった。	51	0.59	0.691
8	英語でのエッセイの書き方についての知識が深まった。	49	0.56	0.677
9	IELTS というテストについての知識が深まった。	48	0.55	0.711
10	英語を聞き取ることが上手になった。	48	0.55	0.728
11	英語での会話の方法について知識が深まった。	43	0.5	0.715
12	海外留学したいという気持ちが強くなった。	42	0.48	0.645
13	英語の語彙が増えた。	33	0.38	0.555
14	海外留学の事前準備になった。	33	0.38	0.633
15	メンターの出身大学に海外留学したいという気持ちが強くなった。	9	0.1	0.306
16	その他	4	0.05	0.211

その他の回答には、「英会話への苦手意識が若干軽減された」や「わかりやすい英語で外国人に自分や日本のことをもっと発信できるようになりたいと思えるようになった」というものがある。ここから、メンタリングを通して、英語学習への意欲や、英語を使用することへの自信が高まったことがメンティーにとって重要であったことがわかる。次いで、友人関係構築や異文化への興味向上と続いており、メンタリングには英語習得以外のインセンティブが与えられることが明らかとなった。

- **質問６　HELP! 参加前にあなたが主に行ってきた英語学習方法と、HELP! で行った英語学習方法に相違点があれば、その内容としてあてはまるものに印をつけてください。（複数回答可）**

この質問の回答は、メンタリングでは、相手がいるので英語学習へのモチベーションが上がる（21名）、教科書ベースの学習より、メンタリングの方が実際に使える英語を学習することができる（19名）、自分ひとりの学習より、メンタリングの方が英単語をよく覚えられる（10名）、TED などの視聴覚教材の使用（1名）、相違点はない（1名）、その他（4名、スピーキングのチェックなど）と続いている。ここから、メンタリングによる英語学習は、相手がいることによるモチベーションの増加することや、実践的な英語使用という点が特徴的であり、メンティーにとって重要だったといえる。

- **質問７　メンタリングの時間外にもメンターと交流する機会がありましたか。**

回答は、よくあった（9名）、ときどきあった（28名）、あまりなかった（28名）、全くなかった（22名）となっており、メンタリング時間外での交流の機会が当初期待されたより少ないことがうかがえる。

- **質問８　質問７で、「あまりなかった」「全くなかった」と答えた方へ：その理由としてあてはまるものに印をつけてください。（複数回答可）**

この質問に対する回答は、自分に時間がなかった（33名）、メンターに時間がなかった（16名）、交流したかったが自分に積極性が足りなかった（15名）、趣味や性格が合わなかった（6名）となっており、メンティーが多忙であることがメンターとの交流が少ない主な理由であるといえる。

- **質問９　留学生とのメンタリングは、あなたの英語学習に役に立ちましたか？**

この回答は、大変役立った（76名）、やや役立った（11名）、あまり役に立っていない（0名）、全く役に立っていない（0名）となっており、回答者全員にとってメンタリングが彼らの英語学習に役立っていたことがわかる。

- **質問10　留学生とのメンタリングは、あなたの異文化交流の役に立ちましたか？**

この回答は、大変役立った（69名）、やや役立った（17名）、あまり役に立っていない（1名）、全く役に立っていない（0名）となっており、ほとんどのメンティーにとってメンタリングは異文化交流にも役立っていたといえる。

- **質問11　そのほか、留学生との英語学習に関して何かコメントがありましたら、自由に記述してください。**

この質問に関しては、23名がプログラムに対する感謝のコメントを記入していたが、プログラムの改善案もいくつか見られた。そのほとんどが、他のメンター・メンティーとも交流する機会がほしい、Topic Party などの交流イベントを行ってほしい、といった参加者同士の交流に関するものであった。プログラム制度の改善案について細かく記入したメンターとは異なり、メンティーはメンタリングによる英語学習の制度自体には満足しているが、交流機会の提供を望む声が多いことがわかった。

6　今後の HELP!

6-1　HELP! の改善点

本項では、2018年度に実施した改善と今後取り組む予定の改善点について記述する。

まず、2018年度は、これまでの中間・終了後アンケートの結果を受けて、以下のような改善を行った。

- 募集締め切り前に HELP! 説明会を２回実施
- メンティー応募用紙に、「日本語ができるメンター希望」という欄を追加。ただし、希望に添えない場合、マッチングの可能性が低くなるという説明文も記載。
- メンターの応募用紙にのみ趣味記載欄を追加
- メンティーの提出書類である事前課題のエッセイに趣味も含めた自己紹介文を書く課題を追加
- BC に、タブレット端末で使えるアプリやサイトを提供して頂きたいと依頼
- オリエンテーション時に配布する紙媒体の資料を PDF 化し、クラウド上で共有
- 自由参加のランチ交流会を実施

上記のうち、HELP! 説明会の実施は、参加希望者に応募の際、前もって自分のスケジュールとよく相談することを伝えるためにも、効果的であったといえる。

今後は、メンタリングの時間について90分×８回だけでなく60分×12回も認めるかどうか、について考える必要があるだろう。また、現状では、メンターの負担が大きい傾向があるため、メンターの不満を軽減するルール作りにも取り組みたい。そして、メンティーによるリクエストが多い、参加者同士の交流機会の提供方法についても考える予定である。限られたリソースの中で、HELP! 担当者主催の定期的な交流会の実施は、現状では非常に難しい。そのため、参加者同士が自然と交流できる仕組み作りを行うことが重要だと思われる。

6-2　HELP!＋（プラス）への取り組み

2018年度は、学内プロジェクトとしての HELP! の他に、外部機関と連携して、HELP!+ も試行した。この HELP!+ は、2018年８月に、株式会社甲南学園サービスセンター（以下、KSC）を実施主体とし、BC と CIEE が協力して運営したものである。メンターは HELP! 修了証保持者に限定し、メンティーはＡ高校の男子生徒７人であった。場所は、兵庫県神戸市東灘区にある甲南大学平生記念セミナーハウスに設定された。期間は、８月１日から３日までの３日間で計８時間（一日３時間、３日目のみ２時間）を費やした集中型プログラムとした。この HELP!+ の参加メンターには KSC より謝礼が支給され、終了後は KSC・BC・CIEE 連名の修了証も授与された。

HELP!+ は、2020年の大学入試改革で英語科目に

IELTS を含む民間の資格・検定試験の導入が決定されたことを受けて、KSC と CIEE が合同で企画したものである。2018年度は、パイロット的に実施したが、高校生メンティーの満足度も高かったため、今後、CIEE は KSC との連携を維持しつつ、2019年度夏季にも同様のプログラムを計画している。

6-3　まとめと今後の課題

本稿では、これまで、HELP! の概要およびアンケート調査とその結果、HELP! の改善点、そして2018年度の新たな取り組みである HELP!+ について述べてきた。そこから、HELP! の満足度が高いこと、そして、HELP! が英語教授経験や英語学習だけでなく、異文化理解や異文化交流にも効果があることが明らかとなった。同時に、メンターへの負担やメンタリング時間外の交流が少ないといった問題も浮かび上がった。今後はこれらの問題解決に向けて上記の改善に取り組む予定である。

また、本報告では、限られた人数のアンケート結果しか提示できなかったため、今後は、引き続きアンケートの回答を収集し、より包括的に調査を進めたい。また、アンケート調査だけでは、英語メンタリング学習や、メンター・メンティーの交流について具体的な事例を知ることが難しいため、今後はインタビュー調査も実施し、より詳細な HELP! の教育的効果の解明に努める。

そして、すでに参加満足度の高いプログラムであるが、上記の HELP! 改善案を参考に、より充実したプログラムを目指す。そして、今後、留学生が学内だけでなく地域のグローバル化に貢献するため、具体的には、地域の高校生への英語学習支援、異文化交流機会の提供、グローバルに活躍する大学生ロールモデルの提示のために、HELP!+ の期間および規模を拡大して、「留学生家庭教師」の制度を開発し、その効果検証を行っていきたい。それらについては、今後の課題とし、別稿で論じる予定である。

謝辞

Project HELP! については、その企画段階からブリティッシュ・カウンシルの安田智恵氏、日本英語検定協会の平慶彦氏に多大なご協力をいただいた。また、ウェブサイト MEnTOR の構築・管理等の対応には、(株) アンザスインターナショナルの久米孝明氏に貢献していただいた。さらに、HELP!+ では、株式会社甲南学園サービスセンターの塩見淳子氏、白羽敬子氏、高島由夏氏、正谷恵美氏からの前向きな提案と具体的なアレンジに感謝している。この場を借りて深く御礼申し上げたい。また、国際教育交流センターでは、遠藤美紀氏、垣塚保子氏がプロジェクトの運営に尽力していただいた上、データを提供いただいた。これも深く感謝申し上げたい。

参考文献

Brammerts, H., Kleppin, K. (2001). *Selbstgesteuertes Sprachenlernen im Tandem*. Tübingen: Stauffenburg Verlag.

青木直子・栄苗苗・郭菲・劉姝・王静斎・丁愛美 (2017)「対面式タンデム学習における学び : 日本語学習者と日本語話者のやりとりにおける LRE を手がかりに」『阪大日本語研究』第29号，p.19-41.

岡部真理子 (2018)「留学生を支援する日本人チューターの学び : PAC 分析を用いたアジア圏チューターの事例から」『都留文科大學研究紀要』第87号，p.297-315.

小林浩明 (2016)「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』第14号，p.135-145.

小松翠 (2013)「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第12号，p.71-86.

歳岡冴香 (2016a)「留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み」『大阪大学高等教育研究』第 4 号，p.87-91.

歳岡冴香 (2016b)「大学内の異言語・異文化環境を活かした英語学習支援」『大学英語教育学会関西支部秋季大会』

中山亜紀子 (2001)「短期留学生の対人関係に関する一試論」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第 5 号，p.59-72.

中野遼子 (2018)「Project HELP! 実践報告 ── 留学生との交流を促進する英語学習プログラムの検討 ──」『大阪大学第 2 回豊中地区研究交流会』(ポスター発表)

廣森友人 (2015)『英語学習のメカニズム ── 第二言語習得研究に基づく効果的な勉強法』大修館書店

副田恵理子 (2011)「チューター活動における日本語学習支援の実態 : 留学生の視点から」『藤女子大学紀要第 1 部』第48号，p.95-112.

脇坂真彩子 (2013)「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』第25号，p.105-135.